語り手の隠蔽するディストピア
——カズオ・イシグロの *Never Let Me Go* についての一考察

加藤 千博

はじめに

Kazuo Ishiguro (1954–)の六作目となる小説 *Never Let Me Go* (2005)を文学ジャンルとして区分するとき、主に二つの見方が存在する。一つが、この作品を恋愛小説と位置づけ、主人公が寄宿学校時代の仲間と繰り広げた恋愛と友情について振り返る物語であるとする見方。もう一つが、この作品をディストピア小説と位置づけ、クローン人間たちの悲哀と残酷な人間社会を描いたとする見方である。作者の Ishiguro 自身は、「この物語は普遍的な人間のありようの残酷さに対抗する本質的なラブストーリーだと思っています」(イシグロ, 「コメント」TBS ホームページ) と述べ、この小説の主軸が恋愛物語であることを認めている。つまり、クローン人間による臓器提供というサイエンスフィクション (SF) の設定を取りながらも、恋愛や友情、人間の記憶という普遍的なテーマを描いたというのである。しかし本当にそこに Ishiguro の真意はあるのだろうか。これまでの Ishiguro 作品に見られる特徴は、卓越した技巧により様々なテーマが重層的となり、読者に一義的な読みを与えるものとはなっていないことである (Beedham 3; Drag 1)。すると、この作品にも作者特有の技巧が織り込まれているかもしれない。

小説 *Never Let Me Go* の物語世界は、再生医療の技術が高度に発達し、非人道的な医療行為が行われるディストピア社会となっているが、国家制度そのものが示されているわけではないので、厳密な意味ではこの作品をユートピア文学とはジャンルづけすることはできない[1]。狭義のユートピア文学作品とは、理想的もしくは反理想的な架空の国家制度を提示することにより、現実社会の批判と改善を示唆する機能を持つものである (Vieira 23)。しかしながら、この小説はイギリスに場面設定を置き、クローン人間の短い生涯を物語の中心に据えることで、国家制度の一部分を描写しながら社会への辛辣な警告となっている。したがって、この作品をユートピア文学作品と位置づけることも可能といえるのではないだろうか。

ではこの作品をユートピア文学作品と捉えると、このジャンルの特性を鑑みれば、作者による諷刺や社会批判を読みとることが可能となってくる。表面的には、高度に発達しすぎる医療技術と、その技術をコントロールできない人間倫理に対する批判であると、解釈するのが素直な読み方であろう。では、このようなディストピア世界観を示すために、作者はどのような小説上の技巧を用いたのであろうか。

本稿では、はじめに主人公 Kathy による一人称の語りと、その語りが依拠する彼女の記憶に焦点をあて、本作品における語り手の特徴を明らかにする。そのうえで、語り手の提示する世界のディストピア的性質を明らかにし、この作品における Ishiguro の小説技巧を紐解いていく。

1. 語り手

John Mullan が指摘するように、Ishiguro 作品においては、とりわけ語り手の記憶が重要な役割を果たすことになる（Mullan 110）。*Never Let Me Go* においても、語り手である Kathy が不確かな記憶を頼りに 31 年間の生涯を自ら振り返る物語となっている。作品のディストピア的な世界観を提示するために、語り手の Kathy はどのような役割を担っているのだろうか。

全三部（全 23 章）から構成されるこの作品の第一部では、主に寄宿学校 Hailsham での生活が語られている。他のクローンが育てられる施設とは異なり、Hailsham では格別の配慮が払われている。Kathy と親友の Tommy と Ruth は、5、6 歳から 16 歳までの時期を、この施設で外の人間世界とは遮断され、guardian（保護官）と呼ばれる教師役の大人たちによって大切に育てられている。Kathy はこの Hailsham 時代を “a kind of golden time” (76)であると表現し、楽しかったよき思い出として振り返っている。つまり、Hailsham は、Kathy たちにとっては幼少期から少年期を過ごしたユートピア的な空間である。しかしこの Hailsham という名前には、ユートピア（utopia）が「理想的な場所」と「どこにもない場所」という二重の意味を帯びているのと同様に、「健全な」(hale) と「偽善的行為」(sham) の二つの意味が含まれている。ここにユートピア文学特有の撞着技法を確認することができよう。即ち、ユートピア的に表象される Hailsham には、実はそうではない側面があることがこの名称から推察できる。

The Remains of the Day (1989)の語り手である執事 Stevens と同様に、*Never Let Me Go* の Kathy も「信頼できない語り手」と見做せば、彼女の語る Hailsham の偽善性も容易に推測できよう。しかし Ishiguro 本人は、Kathy を「基本的にはきわめてストレートな語り手」であり、この作品では「信頼のおけない語り手を使うのをよそうと、決めた」（柴田 43）と述べている。確かに、Stevens の語る過去と自分の行為を正当化しようとする姿には欺瞞性が見られるのに対して、Kathy の語る内容は、一見、偽りがあるように感じにくい。そういう意味では彼女は「ストレートな語り手」といえるかもしれない。しかしながら、Kathy は重要なことの多くを語っておらず、「躊躇いがちな」語り手である。一人称の語りである限り、語り手が知らないことは読者も知る由がない。“I'd suppose now it was something passed down through the different generations of Hailsham students. I remember a time when I could only have been five or six” (31)と語る Kathy は、「展示館」というものがどのようなものかは実

際には知らず、先輩たちから伝え聞いたことを読者に示すだけである。また 5、6 歳以前の記憶はないため、彼女自身の身元や出生の秘密も明かされることはない。このように、一人称の語りの限界を利用して、重要な真実を語らない主人公を語り手として、作者は利用している。つまり Kathy は Hailsham の美点のみを伝える役割となっている。そういう意味では、彼女はやはり「信頼できない語り手」のままである。語り手に敢えて語らせない部分を持たせることで、読者に多様な解釈を迫るテクストとなっている[2]。

Kathy の語り口調は終始単調であり、感情を押し殺したかのように抑制が効いている。友人であり恋人でもあった今は亡き Tommy と過ごした日々を振り返る際も、淡々と物語っている。しかしその際、"But as I say, I don't want to paint too gloomy a view of that time at Kingsfield" (237-38)と本人が告白するように、Kathy は「陰気に（too gloomy）」語ることを避け、さほど悲しい出来事ではないかの如く振舞っている。"Once I'm able to have a quieter life, in whichever centre they send me to, I'll have Hailsham with me, safely in my head, and that'll be something no one can take away" (281)と結末近くで語る Kathy のことばには、臓器提供が始まることに対する恐怖心よりも、「静かな生活（quieter life）」に入れることへの期待が仄めかされている。しかしその後には、"and though the tears rolled down my face, I wasn't sobbing or out of control"（282）と自身で語っているように、涙を流しながらも必死に自分の感情を抑え込んでいることがわかる。

これらの語りから、近いうちに始まる自身の臓器提供に対する恐怖心と、変えることのできない自分たちの運命に対する絶望感を、Kathy が隠し続けていたことを読みとることができる。つまり、語り手の Kathy が自分の感情を抑制しながら、Hailsham やその後の出来事を語っていたことを、この小説の最後の場面になってようやく我々読者は知るのである。したがって、彼女があたかもユートピア的な時代であったかのように語る Hailsham という施設を、彼女のことば通りに解釈することはできない。これがこの作品における語り手の特徴である。

2. 記憶

記憶が Ishiguro 作品において重要な役割を果たしていることは、多くの批評家が指摘するところである。Mark Currie は、往々にして一人称の語り手が信頼できないのは、記憶の誤りに起因するとしたうえで、繰り返し「思い出すことができない」と語る Kathy の記憶の曖昧性を指摘している（Currie 95）。事実 Kathy は、"This was all a long time ago so I might have some of it wrong" (13)と述べているように、自分の記憶に誤りがあるかもしれないことを正直に告白している。Kathy の語る内容を読者が鵜呑みにはできないことを先にも示したが、Kathy は本当に記憶が不確かなだけであろうか。

Hailsham 出身の Kathy が、臓器提供開始を目前に控えながらも前向きに生きていけるのは、過去の記憶を大事に保っているからである。Hailsham 時代の楽しかった記憶が Kathy にとってのかけがえのない宝となっており、その一例がカセットテープであろう。小説のタイトルにもなっている 'Never Let Me Go'という音楽テープは、Tommy や Ruth との思い出に溢れた品となっている。

> I was still feeling a pang of regret that we'd found it so quickly . . . Even then, it was mainly a nostalgia thing, and today, if I happen to get the tape out and look at it, it brings back memories of that afternoon in Norfolk every bit as much as it does our Hailsham days. (171, 下線筆者)

上記の引用が示しているのは、Kathy にとってこのテープの価値は、中味の音楽を聴いている時ではなく、Tommy や Ruth や Hailsham 時代を思い出している時に生じるということである。つまり、カセットテープそのものに価値があるのではなく、それが過去の記憶と結びつくことによって重要性を帯びてくる。

カセットテープの例からも明らかなように、Kathy は記憶を非常に大切にしているが、その一方で、Ruth は記憶をできる限り捨て去ろうとしており、以下の場面にあるように、二人は意見が対立する。

> 'Ruth, don't give me that. There's no way you've forgotten. You know that route was out of bounds.'
>
> Maybe it was a bit sharp, the way I said it. Anyway, Ruth didn't back down. She continued pretending to remember nothing, and I got all the more irritated. (198-99, 下線筆者)

Hailsham 時代の思い出をわざと知らないふりをする Ruth に、Kathy は我慢できず、二人の溝は決定的となる。このように記憶の扱い方の異なる二人は、小説上対極的な立場にある。Hailsham 時代の思い出の品を全て処分してしまった Ruth は、その後は非常に苦悩に満ちた生活を送ることになる。死に際しても登場人物の中で最も苦しんだ様子が描かれている。一方、Kathy は、思い出の品とそれにまつわる記憶を大事に携えて、待ち受ける臓器提供と死に対して、果敢に立ち向かおうとしている。

Kathy が、"The memories I value most, I don't see them ever fading. I lost Ruth, then I lost Tommy, but I won't lose my memories of them" (280, 下線筆者)と語るように、彼女の記憶が「薄れる (fade)」ことはない。"Remember the guardians, before we left, how they kept reminding us we could take our collections with us" (128) とあるように、思い出の品、即ち記憶を大事にするようにと Hailsham

では教えられている。Hailsham の教育に忠実に従い、記憶を大切に扱う Kathy にとって、記憶が不確かであるというのは矛盾してしまう。そうすると、Kathy は記憶が不確かなのではなく、不確かなふりをしているだけということになろう。ここに登場人物設定における作者 Ishiguro の意図が見えてくる。つまり Kathy は、語る内容を意図的に曖昧にする人物ではないかと解釈できる。すると、Kathy は記憶が曖昧なふりをして、何かを隠しているのではないだろうか。

Kathy が Hailsham をユートピア的な施設であるかのように描写していることは、先に示したとおりであるが、彼女は Hailsham の真の姿も明かしてはいない。Hailsham をユートピアと信じ込むクローンたちは、非常に従順なディストピア社会の住人である。Kathy もそのうちの一人であるが、彼女の語りの口調と意図的ともいえる記憶の曖昧性から判断すると、Kathy はこの Hailsham のユートピア性の正体、即ちディストピア社会としてのイデオロギー装置に気づいているのではないだろうか[3]。そして、それこそが正に彼女が隠そうとするものであろう。

3. 「従順な」クローン

語り手の Kathy がユートピア的な施設として紹介する Hailsham は、不遇なクローン人間たちに幸福な子供時代を過ごさせて、できる限り「人間らしい」生活が送れるよう教育を施している。しかしながら、この施設は結果的には、クローン人間が臓器提供を従順に受け入れるようにマインドコントロールする場ともなっている。Mark Fisher が、*Never Let Me Go* を従属階級であるクローンから時間、臓器、人生（生命）を奪い取るディストピア作品として分析しているように（Fisher 27）、クローンたちは自分たちの従属性に疑問を抱いてはいない。語り手の Kathy も、果たしてこの従属性を素直に受け入れているのであろうか。

小説 *Never Let Me Go* の中では、クローンをどのように製造しているかは示されていない。しかし Kathy の語りから、Hailsham ではクローンである子供たちがどのように育てられていたかが垣間見えてくる。臓器提供という彼らの使命は、直接的に教えられるのではなく、段階的に刷り込まれるようにして教え込まれていく。"I *always* knew about donations in some vague way . . . It was like we'd heard everything somewhere before" (81) とあるように、Hailsham の生徒たちは、いつどこで臓器提供のことを知らされたかはわからないが、気づいたら既にそのことを理解している。これは Aldous Huxley (1894-1963) の *Brave New World* (1932) で、睡眠中に本人の知らぬ間に条件づけ教育が施され、自分の階級への愛着心を無意識的に植えつけられるのと似ている。Hailsham で Lucy 先生に "you'll start to donate your vital organs" (80) とはっきり臓器提供について教えられた際も、臓器が採取や剥奪される

のではなく、「提供する (donate)」という自発性を帯びたことばが用いられており (塚脇 131)、Hailsham のイデオロギーに対して生徒たちは何の疑問も抱いていない。

Hailsham の主任保護官の Emily 先生は、嘘をつくことを正当化している。以下の引用は物語終盤で、Emily 先生が Kathy と Tommy に Hailsham 設置の意義を語る場面である。

> Hailsham would not have been Hailsham if we hadn't. Very well, sometimes that meant we kept things from you, lied to you. Yes, many ways we *fooled* you. I suppose you could even call it that. But we sheltered you during those years, and we gave you your childhoods. (262-63, 下線筆者)

Kathy も Tommy も、Hailsham を卒業して 15 年ほど経って Emily 先生に会いに行くこの場面の時までは、Hailsham の真の役割を知らなかった。それは、上記引用にあるように、クローンに人間らしい子供時代を与えることであり、そのためには嘘をつくことも必要となる。しかし、Hailsham の生徒たちは自分たちクローンが外の人間世界から隔離されていたり、嘘で守られたりしていることを知らない。

また Hailsham では、子供たちは特別な存在であると教えられている。卒業後のコテージでの生活や介護人としての生活を通じて、彼らは Hailsham 出身であることの優位性を一層認識することになる。"There was something odd about the way she was always mentioning the fact that we'd come from Hailsham" (139)とあるように、コテージでは Hailsham 出身者は、何かにつけて他の施設出身者から羨望の眼差しで見られる。介護人となった Kathy が、死を間近に控えたクローン患者に自分の Hailsham の思い出を語る場面では、"What he wanted was not just to hear about Hailsham, but to remember Hailsham, just like it had been his own childhood" (5)とあるように、他の施設出身のクローンが、Hailsham 出身の Kathy の記憶をあたかも自分の記憶であるかの如く聞き入り、自分の記憶を Kathy の記憶で上書きをしている。そして Kathy 自身は、"how lucky we'd been" (5)と自分たちの恵まれた境遇を振り返っている。

このように、Hailsham 出身の生徒たちは、Hailsham がユートピア的な施設であると信じ込んでいる。しかし、Hailsham は表向きには、Emily 先生が語るように、クローンに人間らしい尊厳を与えてやる場所であるが、その裏には、従順に臓器提供に応じるクローンを養成するという目的がある[4]。この裏の目的に気づいてしまった Kathy は、この物語を進めるにあたって、自分の感情を抑制し単調なトーンで語り、Hailsham の真実の姿を隠し通そうと振舞う。しかしながら、語ろうとしない彼女の語りから、クローンたちが必ずしも従順ではないことが見えてくる。

4. 隠された抵抗

Kathy の語りによれば、クローンたちは皆自分たちの運命を従順に受け入れ、使命を終えるのを静かに待ち受けているようである。Wai-chew Sim は、ディストピア作品の特徴として、主人公たちの逃亡を挙げているが、*Never Let Me Go* の登場人物たちが逃亡せずに運命を受け入れていることに対して違和感を示している（Sim 79）。Mullan も、抵抗が語られていないことによって、読者を混乱させるとともに、逆に抵抗の痕跡を連想させると指摘している（Mullan 105-06）。では Kathy の語るように、クローンたちは本当に無抵抗なのであろうか。

Kathy は事実を曲げて語ることはないが、都合の悪い真実も語っていない。しかし、彼女の語りの中には、クローンたちの抵抗の痕跡を見出すことができる。コテージでの生活中、他の施設出身のカップル Chrissie と Rodney が、Hailsham 出身のカップルには臓器提供の猶予期間が与えられるという噂の真相について、Kathy たちに問いただす場面がある。

> I could see them toying with the idea of talking to us about it, see them refining how they'd do it, what exactly they'd say. I looked again at Chrissie and Rodney in front of me, gazing at Ruth, and tried to read their faces. Chrissie looked both <u>afraid and hopeful</u>. Rodney looked <u>on edge</u>, like he didn't trust himself not to blurt out something he wasn't supposed to. (151, 下線筆者)

上記場面では、提供猶予という禁断の話題を持ち出す瞬間、Chrissie は不安と希望を、Rodney は苛立ちをわずかながらも顔に表しているのを、Kathy は見逃していない。そして Chrissie は、"her voice wobbling slightly" (152)とあるように、声を震わせながら勇気を振り絞ってその話題を持ち出している。また Chrissie の死に関して、"What she would have wanted? It wasn't him on that table, trying to <u>cling onto life</u>" (222, 下線筆者)と、Ruth が Kathy に激しく言い寄っている。ここでは、提供の猶予を得られなかった Chrissie の無念さ、つまり自分たちの運命を定めているシステムに対して抵抗できなかった無念さを、Ruth が代弁している。これらの場面から、クローンたちが望んでいるのは、提供の猶予であり、生への固執を示していることがわかる。結局、臓器提供猶予の話は真実ではなかったことを Kathy は知るが、その真相を語りながら彼女が伝えようとしているのは、生への執着、即ち人間社会への抵抗における葛藤ではないだろうか。Kathy の語りは、自分たちの得られなかった臓器提供の猶予を、若い世代のクローンたちに託しているかのようである。

物語中で最も抵抗を示しているとみられる人物が、Tommy である。彼は幼少期から、感情をコントロールすることが苦手であった。"We'd all seen plenty of Tommy's tantrums by then" (9) と Kathy が語るように、Tommy の癇癪は Hailsham では有名で、彼へのいじめの原因にもなっていた。提供の猶予が真実でないことを知った Tommy が、暗闇の中で雄叫びを上げる場面がある。"At first I didn't even think it was him, but some maniac who'd been lurking in the bushes" (268) と Kathy が語るように、狂人かと思われるほど Tommy の怒り方は激しかった。克服したはずの癇癪をこれまでにないほどの激しさで再燃させてしまった Tommy に対して、Kathy は癇癪の原因が理解できたと告白する。

> 'I was thinking,' I said, 'about back then, at Hailsham, when you used to go bonkers like that, and we couldn't understand it. We couldn't understand how you could ever get like that. And I was just having this idea, just a thought really. I was thinking maybe the reason you used to get like that was because at some level <u>you always *knew*</u>.' (270, 下線筆者)

上記引用で Kathy が説明しているのは、Tommy は自分たちの運命を潜在的に理解しており、無意識的にそれに抵抗をしていたということである。つまり、Hailsham というディストピア的な施設の中で、唯一そのシステムの欺瞞性を察知し抵抗を示していたのが、Tommy であったということになる。Huxley のディストピア世界では、野蛮人 John が唯一その世界の欺瞞性を感じ、社会への抵抗を試みる存在であった。*Never Let Me Go* では、その役割は Tommy に与えられている。臓器提供という使命を素直に受け入れるように養育される Hailsham で、その社会システムを受け入れられずに抵抗を示していた Tommy と、彼の特異性を見抜いていた Kathy は、このディストピア世界におけるアウトサイダーであるといえる。

イギリスという国家の中に Hailsham という閉じられた世界がある。臓器提供を平然とシステム化する恐ろしいディストピア的な外の世界に対して、Hailsham は、生徒たちを外敵から守り「人間らしい」生活を送らせてやるユートピア的空間となっている。卒業生の誰もが、外の世界に放り出された後は、Hailsham 時代の空想に浸りながら日々を過ごす。こうして、Hailsham 出身のクローンたちは Hailsham のユートピア性を信じ込んでいるが、Kathy と Tommy だけは例外である。Tommy は無自覚的に抵抗を行い、Kathy は Tommy への鋭い観察を通じて、Hailsham の異質性を認識する。Hailsham という最もディストピア的な空間をあたかもユートピア的な空間であるかのように Kathy は語っているが、誠実な Kathy の語りから逆に、彼女の隠そうとする Hailsham のイデオロギーが浮かび上がっているといえる。

おわりに

Never Let Me Go を文学ジャンルとして区分する時、この作品は恋愛小説もしくはディストピア小説と捉えられることが多い。本論ではこの作品をディストピア小説と捉えたうえで、作者がディストピア的な世界観を示すために、どのようなユートピア文学あるいは小説上の技巧を用いたかを分析した。

Ishiguro 作品の特徴は、一人称の語り手と重層的なテーマ構成である。*Never Let Me Go* の語り手 Kathy も、不確かな記憶を頼りに自身の生涯をノスタルジックに思い起こしている。子供時代を過ごした Hailsham は、Kathy たちクローンにとってはユートピア的な空間である。しかし、多くを語ろうとしない Kathy の語りから、Hailsham のディストピア性が浮かび上がってきた。Kathy は、Hailsham のディストピア的なイデオロギーに気づいていながらも、そのディストピア性を隠蔽し、Hailsham 時代を牧歌的でノスタルジックに語っている。

Kathy たちクローンは、臓器提供という不遇の運命を従順に受け入れている。Hailsham 出身のクローンたちは、Hailsham 時代のユートピア的な記憶を大切にすることにより、待ち受ける死への恐怖を克服する。しかしながら、Kathy の語りの断片から、彼らの死への恐怖心と社会システムへの抵抗心が垣間見えてきた。そして、Hailsham という施設が、従順なクローンを養成するためのディストピア的な組織であることを、語り手 Kathy は認知しながらもそれを隠蔽し、これまでの生涯を淡々と語ることに徹していたことが、明らかとなった。

小説 *Never Let Me Go* では、一人称の語り手を通じて、恋愛、友情、記憶、人生観といった普遍的なテーマが前景化され、クローンを利用したディストピア的世界観が背景化されている。曖昧な語り手として設定された主人公の Kathy は、ディストピア社会の欺瞞とイデオロギーを隠蔽しようとするが、逆に彼女の曖昧なことばと表情により、この世界のディストピア性が我々読者には認識させられる仕掛けとなっている。この作品をディストピア小説としてユートピア文学に位置づけることにより、このような曖昧な語り手の技巧を用いた作者の戦略を見出すことができ、作品のより深い理解へとつながることが、この論考を通じて明らかとなった。

注

1. ユートピア文学では、ディストピア作品や逆ユートピア作品も含めてユートピア文学作品と呼ぶことが多い。Richard Trahair は、*Utopia and Utopians: An Historical Dictionary*（1999）の中で、究極的に理想的な社会をユートピア、それに対峙する究極的に望ましくない社会をディストピア、その両者の中間に位置し、様々な望ましくない欠点を露呈する社会を逆ユートピアあるいは反ユートピア

として定義している（Trahair 110; 453-54）。本稿でも、この定義に従いながら、ディストピア作品も含めてユートピア文学作品と呼ぶことにする。

2. 20 世紀後半に Roland Barthes がテクスト論を提唱して以来、小説では、読者に解釈が委ねられる読み方が広く浸透しているが、J. C. Davis が *Utopia*（1516）における Thomas More の意図は「読者の反応を喚起する」（Davis 32）ことであると論じているように、とりわけユートピア文学では、読者に解釈を委ねるのが、特徴の一つとなっている。

3. ここで言う「イデオロギー」とは、支配者階級が階級構造を維持し自らを正当化するための虚偽意識のことを指すが、更には社会全体に浸透する現状を粉飾、隠蔽するための理念をも含む。イデオロギーの定義に関しては、Karl Manheim（1991）を参照。

4. Hailsham がディストピア的な場所といえる理由に、Emily 先生たちが自分たちの偽善的な活動に疑問を抱いていない点もある。物語終盤で Kathy と Tommy の前に車いすで登場した Emily 先生は、大きな手術からの回復途中のような健康状態であり、臓器提供を受けた直後ともいえる様子である。手術の時期を考えると、Ruth が提供者の可能性があるが、Ruth の「ポシブル（親元）」が Emily 先生だとすると、Hailsham を取り巻く社会は完全なディストピア世界といえる。

引用文献

Beedham, Matthew. *The Novels of Kazuo Ishiguro: A Reader's Guide to Essential Criticism*. Palgrave Macmillan, 2010.

Currie, Mark. "Controlling Time: Never Let Me Go." *Kazuo Ishiguro: Contemporary Critical Perspectives*, edited by Sean Matthews and Sebastian Groes. Continuum, 2009, pp. 91-103.

Davis, C. J. "Thomas More's *Utopia*: sources, legacy, and interpretation." *Cambridge Companion to Utopian Literature*, edited by Gregory Claeys. Cambridge UP, 2010, pp. 28-50.

Drag, Wojciech. *Revisiting Loss: Memory, Trauma and Nostalgia in the Novels of Kazuo Ishiguro*. Cambridge Scholars Publishing, 2014.

Fisher, Mark. "Precarious Dystopias: *The Hunger Games*, *in Time*, and *Never Let Me Go*." *Film Quarterly*. vol. 65, no. 4, 2012, pp. 27-33.

Huxley, Aldous. *Brave New World*. 1932. Flamingo, 1994.

Ishiguro, Kazuo. *Never Let Me Go*. Faber and Faber Limited, 2005.

Manheim, Karl. *Ideology and Utopia: an introduction to the sociology of knowledge*. 1936. Routledge, 1991.

Mullan, John. "On First Reading Kazuo Ishiguro's *Never Let Me Go*." *Kazuo Ishiguro: Contemporary Critical Perspectives*, edited by Sean Matthews and Sebastian Groes. Continuum, 2009, pp. 104-13.

Sim, Wai-chew. *Kazuo Ishiguro: Routledge Guides to Literature*. Routledge, 2010.

Trahair, Richard. *Utopia and Utopians: An Historical Dictionary*. Greenwood P, 1999.

Vieira, Fátima. "The Concept of Utopia." *The Cambridge Companion to Utopian Literature*, edited by Gregory Claeys. Cambridge UP, 2010, pp. 3-27.

イシグロ, カズオ「イシグロ先生からのコメント」『わたしを離さないで』TBS ホームページ. Web. Dec. 17th 2018.

ーーー.「『わたしを離さないで』、そして村上春樹のこと」大野和基（インタビュー・訳）『文學界』第 60 巻 第 8 号, 2006, pp. 130-46.

柴田元幸「ぼくらは一九五四年に生まれた」『Coyote』2008 年 4 月号, no.26, 2008, pp. 42-43.

塚脇由美子「カズオ・イシグロの小説における現実を構成する語り手たち」（京都府立大学大学院博士論文）2015, 京都府立大学学術機関レポジトリ Web.

A Study of Kazuo Ishiguro's *Never Let Me Go*: Narrator Concealment and Dystopia

KATO Chihiro

Summary: When Kazuo Ishiguro's sixth novel, *Never Let Me Go* (2005), is classified within a literary genre, the work is often considered either romantic or dystopian. This paper, through considering the work as a dystopian novel, explores what kind of literary technique the author utilized to show his dystopian view. Noted features of Ishiguro's works include first-person narrators and multilayered themes. Kathy, the narrator of *Never Let Me Go*, recalls her life nostalgically, relying on her uncertain memories. Hailsham, where Kathy and her friends spent their childhood, is a utopian space for clones. However, the dystopian nature of Hailsham is revealed through Kathy's reluctant narration. In this novel, universal themes such as love, friendship, memory, and a view of life are foregrounded by means of a first-person narrative and backgrounded by a dystopian world view depicting clone society. This paper attempts to expose how such a narrative technique is related with Ishiguro's view of dystopian society.